

教師が感じる小学校就学直後の学習へのつまずきに関する調査

—学習のつまずき要因と発見について—

杉浦 采夏 東京学芸大学教育学研究科

橋本 創一 東京学芸大学教育実践研究支援センター

要 旨：小学校1年生担任教師が感じる、小学校就学直後の1年生における学習態度(興味、関心)、学習スキル、学習活動に影響する心理特性(発達障害様傾向)の3つの側面から、学習のつまずきの様相、発見と就学における引き継ぎに関して調査を行った。学習につまずいている児童は、動機付けといった内向的な面よりも実際のスキルである外向的な面からつまずきや問題が生じている場合が多く、内容的には動作・表現性より言語・認識性につまずきがあると教師は感じていた。特に、学習のつまずきを引き起こす要因として、学習意欲が低いことが最も多く、児童への個別対応として支援員の活用や座席配置の工夫などをおこなっていた。また、学習へのつまずきが予測されても就学時に引き継がれている児童は少なかった。特別な支援が必要な児童に対して就学前に身につけて欲しい準備として、学習態度より学習スキルをあげる教師が多かった。

Key Words： 小学校1年生性、学習のつまずき、就学準備

● ————— I. はじめに

通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査^①では、小・中学校の通常学級に在籍する児童生徒のうち、特別な教育的支援が必要な児童生徒が6.5%に上ることが示された。このうち、知的発達に遅れはみられないものの、学習面で著しい困難を示すと教師が捉えている児童生徒の割合が4.5%と最も多いことが指摘されている。学校現場においても、特別支援教育に関する関心やニーズが高まっており、特に、注意欠如多動性障害(ADHD)や学習障害(LD)といった発達障害児への支援や指導に関する重要性が高まっていると考えられる。

知的発達に遅れはみられないが学習面で著しい困難を示す児童が一定数いるということは、学習につまずいてしまう児童はそれよりも多いことが予想される。発達障害などの特別な教育的ニーズを必要とする子どもたちは、物事のとらえ方の発達に遅れや偏り、あるいは歪みがあることで授業場面が苦しくなり、学習場面で種々の困難として表面化しやすい^②。学習面

のつまずきとしてよく観察される事項として、聞く、話す、読む、書く、計算する、生活・技能などがあげられ、そうした学習行動スキルの問題などに対応して注意集中や言語理解・表現、視覚的認知などの認知特性の精査があり、特に注意集中は多くの場面に共通して吟味される^③。注意集中することの困難さの背景には様々な原因や要因があり、学習の問題と注意との関係は、本質的な問題から二次的、三次的問題と区別して考え、対応をとるべきだとされている^④。情緒の不安定さから多動となり学習の問題が生じる者と、LDのような特性により情緒的に不安定さが増し多動が表面化する者、ADHDのような特性により学習上の困難が生じ情緒面の問題が生じる者、といったタイプの違い^⑤によって子どもへの対応や支援は大きく異なってくる。

3歳児健診までの乳幼児健診で発達上の問題が指摘されるのは、その多くが言葉の遅れであり、ADHDやLD、言語発達のない自閉症スペクトラム(ASD)児の落ち着きのなさ、特異的な認知障害、対人関係の障害などは、判断の難しさや気づきにくい問題とされている。そのため、5歳児健診や就学前に行う新たな発達相談の設置が必要であるとされており^⑥、発達障害児が

円滑に就学できるための早期発見・介入の手段として5歳児健診が期待されている⁵⁾¹¹⁾。発達障害が疑われるのは、その症状のために生活や学習に困難を抱えている時であり、一般的に中等度から重度の精神遅滞や自閉症は、通常3歳までに症状が出現し発見することが可能であるが、LDやADHD、軽度知的障害などは集団生活が始まってからその特徴が顕在化してることが多く、就学後に不登校などの不適応といった二次障害を併発していることも少なくない²⁾。特にLD児は、学業不振児と判断され、本人の努力不足によって学習不振に陥り、LDという理解や支援が受けられないまま、結果として二次的な問題である自己肯定感や自己効力感の低下を重篤化させてしまうことがある。LDが表面上から単純に学業不振と捉えられてしまうことにより、心理的課題との鑑別を困難にし、一次的な要因と二次的な問題が混在化してしまうと考えられる。小学校の通常学級において、発達障害の子どもたちへの支援を充実させていくためには、教師が具体的にどのように支援を行えばよいのかを明らかにすることが必要である⁸⁾。しかし、通常学級の教室の中で、学習に困難のある児童に適切な対応をしていくための子ども理解やアセスメントが広がっているとはいいがたい⁹⁾。そこで、学習につまずいてしまうポイントや気づきを教師へ明確に示す必要があるのではないだろうか。

また、乳幼児期の早期からの発見・対応や療育などが就学後も引き継がれることは重要である。発達障害児に対する支援を切れ目なく行う上で、支援計画及び指導計画の引き継ぎは特に重要視されている。医師の診断がある児童に限らず、発達障害児の支援計画及び指導計画の進学先等に対する引き継ぎ状況(平成26年度)をみると、支援計画が作成されていた児童のうち41.3%は進学先等への引き継ぎが行われていたが、58.7%は引き継ぎがなされておらず、この引き継ぎ率は、保育所で34.8%、幼稚園で46.7%であった¹⁰⁾。約半数の発達障害児は引き継ぎが行われずに小学校に入学していた。引き継ぎが行われなかったために、適切な対応が早期になされなかった結果、身体の不調や集団になじめないなどの支障が生じていた¹⁰⁾。

本研究では、小学校1年生担任教師が感じる、小学校就学直後の1年生における学習のつまずきの様相、発見と就学における引き継ぎに関して調査を行った。

● II. 方法

1. 調査時期

2016年7月～9月であった。

2. 調査対象と調査方法

東京都・埼玉県の公立小学校681校の小学校1年生担任教師681名に郵送にて質問紙を配布した。回答のあった公立小学校213校、213名の小学校1年生担任教師を分析対象とした(回収率31.3%)。調査依頼書に、記入・返送された場合は研究参加に同意したとみなすことを明記し、回答した質問紙を厳封後に返送するよう求めた。

3. 調査内容

学習につまずきのある児童と就学前の引き継ぎに関する調査を行なった。障害の診断はなされていないが、学習につまずきがみられる児童1名について、小学校1年生担任教師が学習につまずいていると考えることについて回答を求めた。調査項目は、文部科学省の2012'調査などを参考として、「学習態度・関心」12項目、「学習スキル」14項目、「児童自身の特性」15項目について、そうしたつまずきや行動の有無、ならびに具体的な様子などを記述してもらった。また、就学前機関との引き継ぎや就学前に身につけて欲しい準備などに関する意見について記述を求めた。

4. 倫理的配慮

協力校(者)には調査の趣旨について書面にて説明を行うとともに、調査への参加は強制ではないこと、調査への協力を拒否しても対象者には不利益は生じないこと、測定されたデータは匿名化されて使用されるため、個人情報保護されることを事前に伝え、調査への参加ならびにデータ使用の同意を確認した。

5. 統計学的分析

選択式質問項目の回答については、HAD ver.15⁹⁾を用いて分析を行った。自由記述式質問項目の回答については、KJ法を用いて質的に検討した。KJ法については、恣意的、主観的なデータ解析に陥るのを避けるため、臨床心理学系の大学教師1名と臨床心理学を専攻する大学院生2名がKJ法のデータ解析を行った。

● Ⅲ. 結果

回答のあった 213 校の小学校 1 年生(213 学級)の全児童数は 5,907 名($m=28.00$, $SD=4.69$)であった。3 名の教師は学習へのつまずきへの回答がなく、学校に関することと自由記述のみの回答であったため、分析から除外した。以下、小学校 1 年生担任教師により、210 名の児童がピックアップされ、各々の担任教師が回答した。

1. 学習態度、興味・関心におけるつまずき

小学校 1 年生担任教師が考える、クラスで特に学習につまずきがみられる児童の学習態度、興味・関心の低さについて当てはまるものとして、学習意欲の低さ 164 名(78.1%)、姿勢が悪い 93 名(44.3%)、話を聞こうとしない 58 名(27.6%)、身勝手な行動してしまう(学習活動とは関係のない行動)55 名(26.2%)、学習用具の準備をしない 40 名(19.0%)であった(重複回答可)(Table 1)。

2. 学習におけるスキル面のつまずき

小学校 1 年生担任教師が考える、クラスで特に学習につまずきがみられる児童の学習におけるスキル面の未熟さについて当てはまるものとして、相手に伝わるように説明(話し)ができない 114 名(54.3%)、数の認識や計算ができない 93 名(44.3%)、文字・数字が読めない 86 名(41.0%)、指示や話を覚えていられない 82 名(39.0%)、黒板や教科書の字を書き写せない 76 名(36.2%)であった(重複回答可)(Table 1)。

3. 学習へのつまずきに強く影響していると考えられる児童の特性

小学校 1 年生担任教師が考える、クラスで特に学習につまずきがみられる児童の学習へのつまずきに強く影響していると考えられる児童の発達障害様傾向について当てはまるものとして、自閉症様の困難さ 129 名(61.4%)、ADHD 様の困難さ 99 名(47.1%)、知的障害様の困難さ 97 名(46.2%)、LD 様の困難さ 84 名(40.0%)、発達性協調運動障害様の困難さ 64 名(30.5%)であった(重複回答可)(Table 1)。

4. 数量化Ⅲ類による学習につまずきがみられる児童の要因構造

学習につまずきがみられる児童の要因構造を分析するために、その他の項目を除く、「学習態度、興味・関心」11 項目、「学習スキル」13 項目、「児童自身の特性」14 項目のそれぞれの項目について、サンプルコードごとにない場合は 0 点、ある場合は 1 点を与えて得点化し、数量化Ⅲ類を行った。解析の結果、解釈可能性を判断基準として 2 軸まで検討した。それぞれの軸の固有値は、第 1 軸が.38($0 \leq \lambda \leq 1$)、第 2 軸が.18 であった。数量化Ⅲ類から算出されたカテゴリースコアを用いて第 1 軸を縦軸に、第 2 軸を横軸にとり、学習につまずきがみられる児童の要因を 2 次元の散布図に示した(Fig.1)。第 1 軸のプラス方向には、「想像力の弱さ」のような行動面と考えられる外向性、マイナス方向には、「学習意欲の欠如」のような動機付けと考えられる内向性といった項目が集まっていた。第 2 軸のプラス方向には、「発言をしようとしなない」といった言語・認識性、マイナス

Table 1 学習につまずきが見られる児童の学習態度(興味・関心)、学習スキル、心理行動特性

学習態度、興味・関心の低さ					
	学習意欲の低さ	姿勢の悪さ	話を聞こうとしない	身勝手な行動	学習用具の準備困難
n	164	93	58	55	40
%	78.1	44.3	27.6	26.2	19.0
学習スキルの未熟さ					
	説明スキルの未熟さ	数・計算スキルの未熟さ	読字スキルの未熟さ	記憶スキルの未熟さ	視写スキルの未熟さ
n	114	93	86	82	76
%	54.3	44.3	41.0	39.0	36.2
心理行動特性(発達障害様特性)					
	自閉症様の困難さ	ADHD様の困難さ	知的障害様の困難さ	LD様の困難さ	発達性協調運動障害様の困難さ
n	129	99	97	84	64
%	61.4	47.1	46.2	40.0	30.5

方向には、「感情コントロールの困難」といった動作・表現性といった項目が集まっていた。また、カテゴリースコアに対して、Ward法によるクラスター分析を行なったところ、合理的に分類可能な3つのクラスターを抽出したので、散布図上に示した(Fig.1)。クラスター①(103名)は外向性と言語・認識性、クラスター②(51名)は内向性と言語・認識性、クラスター③(56名)は動作・表現性に学習へのつまずきの要因があると考えられる。

5. 対象児童への個別対応について

学習につまずきが見られる児童への、小学校1年生担任教師による個別対応について、自由記述による回答を得た。KJ法を用いて分類したところ、個別対応の内容としては、学習面(190名;90.5%)、行動・情緒面(58名;27.6%)、生活面(55名;26.2%)、保護者への連絡(24名;11.4%)、対人関係面(11名;5.2%)であった(重複回答可)。具体的な内容として、学習面において多かった対応は、支援員やチームティーチングによる支援や、授業内外の個別指導であった。行動・情緒面では、全体指示が入らない際の個別の声かけや、やる気を出させるといったことがあげられた。生活面では、座席を一番前に設定し、担任から近い位置に座らせるということ

が多くあげられた。

6. 対象児童の就学前や引き継ぎに関して

学習につまずきのみられる児童が就学前に、幼稚園や保育所以外で病院や療育機関等に通っていた割合は、約4分の1にあたる27.7%(59名)であった。就学前に学習のつまずき予測されて、幼稚園・保育所や療育機関等との引き継ぎや連携があった割合は、約半数の41.3%(88名)であった。引き継ぎや連携のあった児童88名のうち、84名(95.5%)について具体的な引き継ぎ内容があげられた。内容としては、幼稚園や保育所からの聞き取りや、支援シートの活用といったことが多くあげられるなか、支援センターの方からの引き継ぎといったこともあげられていた。

7. 学習のつまずきを発見するポイント

小学校1年生の早い段階(1-2学期)で、行動や状況における学習のつまずきについて自由記述による回答を得た。発見するポイントとして一番多かったものは、「話を集中して聞き、一斉支持を理解して集団行動がとれること」が137名(64.3%)であった。「ひらがなが読めることや書けること」は100名(46.9%)で、「数の理解について」は47名(22.1%)であった(重複回答可)。

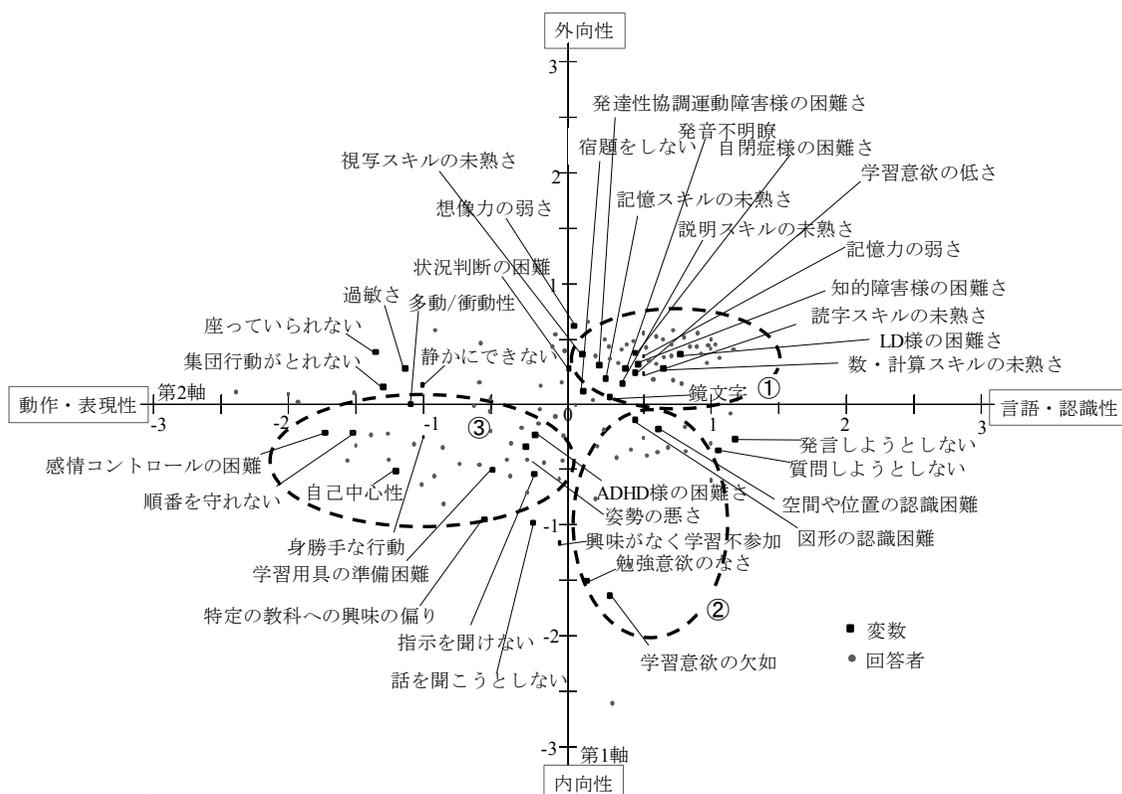


Fig.1 学習につまずきが見られる児童の構造

8. 学習活動につまずかないための就学前に必要な準備

特別な支援が必要な児童に、就学前に身につけてほしい準備における選択式の質問では、①学習することへの興味・関心、態度、②学習するためのスキル、③学習するための能力・知識、④その他といった項目を設けた。一番多かった項目は、②で91名(42.7%)、続いて①が69名(32.4%)、③が20名(9.4%)であった。

身につけてほしい具体的な準備としては、「人の話を黙って聞く姿勢」が118名(55.4%)、「ひらがなが読めること」と「自分の言葉で表現できること」がそれぞれ60名(28.2%)であった(重複回答可)。

IV. 考察

本調査において、回収率が低かったため小学校1年生の学習のつまずきを代表するものではないが、教師が感じる小学校就学直後の学習のつまずきであり、本報告は、そうしたことに関心の高い教師が回答したことを考慮するべきであろう。小学校1年生担任教師は、クラスで特に学習につまずきがみられる児童の学習につまずく要因として、学習態度、興味・関心の「学習意欲の低さ」をあげていた。これについて、表面上は学習内容に興味がなく、意欲がないとみえるかもしれないが、実際には学習内容を理解する段階に問題があると考えられる。学習意欲のない児童は、児童自身の特性ゆえに学習内容を理解することが難しいのではないだろうか。学習につまずく児童のそれぞれの特性を理解することで、一人一人に合った学習のつまずきへの対応ができるだろう。学習内容が理解できていないと考えられるため、児童への個別対応は、支援員の配置や座席を一番前にするといったことが行われており、個別対応可能な工夫がなされているが、教師への負担への負担は大きいだろう。児童の特性を理解していくことにより、教師の負担にならず、児童に合った対応が見つかるのではないだろうか。本調査は小学校入学直後の1年生の1学期で学習につまずきのみられる児童を対象とした。その結果、約4分の1の対象児童が就学前に病院や療育機関等に通っており、就学前に学習のつまずきが予測されて引き継ぎや連携があった児童は約半数であった。学校や地域などに引き継ぎの制度があっても、引き継ぎのなされていない児童

が半数いることが示された。これは総務省¹⁰の結果と一致しており、発達障害児に対する支援が、就学を境に途切れてしまっていることが示唆された。きちんと引き継ぎを行い、切れ目のない支援を行う必要があるのではないだろうか。一方、入学直後からつまずきが発見されている児童の約4分の3の者は、就学前に十分な療育や対応などを受けておらず、早期発見システムと幼児期の支援をあらためて考える必要性が示唆された。回答した教師らの考えでは、学習のつまずきを発見するポイントとして、一斉支持を理解して集団行動がとれることといった学習態度に関することが最も多かった。これは、集団参加や学校生活への適応を重視しているものと考えられる。一方、就学に必要な準備として、学習態度や興味・関心より学習スキルがあげられていた。こちらは、学習場面における個人活動で用いる基本的な学習スキルを身につけておくことが学習活動を遂行する上で必要であるという判断と考えられる。

文献

- 1)別府悦子・熊田正俊・高田美恵子・藤田由紀子(2004): 通常学級における学習困難をもつ児童の特別支援と学校体制について—「特別なわかり方」を必要とする事例を中心に—。中部学院大学・中部学院短期大学研究紀要, 4, 33-45.
- 2)細澤麻里子・田中恭子(2010). 就学前に発見が必要な発達障害, 順天堂医学 56, 7-13.
- 3)J. R. カービー&N. H. ウィリアムス(前田 豊編訳)(2011): 教室での注意問題の状況。田中道治・前川久男・前田 豊編訳: 学習の問題への認知的アプローチ—PASS 理論による学習メカニズムの理解—。北大路書房, pp91-99.
- 4)小枝達也(2005). 注意欠陥/多動性障害と学習障害の早期発見について—鳥取県における5歳児健診の取り組みと提案—。脳と発達 37, 145-149.
- 5)小枝達也(2006): 軽度発達障害児に対する気づきと支援のマニュアル。厚生労働科学研究費補助金(子ども家庭総合研究事業)軽度発達障害児の発見と対応システムおよびそのマニュアル開発に関する研究。
- 6)文部科学省(1999): 学習障害児に対する指導について(報告)。
- 7)岡崎慎治(2017): なぜ授業に集中できないのか? —子供の認知特性を中心に—。発達教育, 36, 4-11.

- 8) 司城紀代美(2013) : 通常の学級における発達障害の子どもへの支援に関する研究動向—「多様な学習者」による教室での「相互作用」という視点から—. 国立特別支援教育総合研究所研究紀要, 40, 97-108.
- 9) 清水裕士(2016) : フリーの統計分析ソフト HAD : 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案. メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- 10) 総務省(2017) : 発達障害者支援に関する行政評価・監視結果報告書.
- 11) 弓削マリ子・金 有耳(2009) : 5 歳児モデル健診受診児の 1 年後の検討. 脳と発達, 41, 269-274.

(受稿 H29. 5. 10, 受理 H29. 6. 22)